

# プロティノスにおける時間の誕生

— 『エネアデス』 III 7 —

内 藤 純 郎

『エネアデス』 III 7はポルピュリオスによって「永遠と時間について」と名づけられている。<sup>(1)</sup> プロティノスは第1章で、永遠と時間についてどのような前提でそしてどのような方法で問題を考えるかを説明する。それから第2章から第6章まで、永遠についてのいくつかの定義が検討される。第7章から最後の第13章までは時間論であり、そのうち第10章まではプロティノス以前の哲学者たちの批判に当てられていて、プロティノス自身の見解は第11章以後で示される。この論稿では私たちはまず第1章を中心にとりあげて、「永遠と時間について」全体の前提である永遠と時間の関係と、永遠と時間について考える方法を明らかにする。つぎにプロティノス自身の見解がとくに興味深く記述されている第11章を第1章で提起された問題と関連させて考えて、プロティノスの哲学の特徴を明らかにしたいと思う。

## 1

プロティノスは第1章の初めの部分で永遠と時間を区別して、「永遠と時間はそれぞれ違うものであって、前者は永久の本性にかかわり、時間は生成するものとこの万有にかかわると私たちは言いながら……」<sup>(2)</sup> (1-3) と言う。「永久の本性」とは知性や知性界を意味するから、永遠と時間と

の違いとは知性界に属するものと生成するものとの違いであり、永遠と時間との関係は知性界とこの世界との関係に等しいと言うことができる。私たちがこのように永遠と時間について語ることができるのは、「いわば思考のかなり集中した直観によって、永遠と時間について何らかの明らかな印象を私たち自身の魂のうちにもっていると思う」（4-6）からである。しかしこれらを注意深く検討しようとして、いわばそれらに近づこうと試みると、私たちはどう考えたらよいかわからなくなる。そこで私たちは古代の哲学者たちの見解をとりあげて、それで充分であると思って満足し、それらについての探究をやめてしまう。しかし彼らのうちのある者たちは真実を見出したと考えるべきであるから、もっともよく真実を見出した人たちが誰であるか、またどのようにして私たちにもこれらについての理解が生じるのか、こういったことを考えるのが適切である（7-16）。このようにプロティノスは永遠と時間について哲学史的な検討を試みると同時に、私たち自身がどのようにして永遠と時間を理解するかを考えることが重要であると言う。

真実を見出した哲学者とは、プロティノスによればプラトンである。「ティマイオス」を思い浮かべながら、プロティノスは続ける、「そしてまず永遠について、永遠が時間と違うものであるとする人たちが永遠とはいったい何であると考えているかを探究しなければならない。というのは、彼らは時間とは原型の像であると主張しているので、原型として存在するものが知られれば、おそらく原型の像にかんすることも明らかになるだろうからである」（16-20）。しかしながら、初めに永遠を観想するという方法に対して、プロティノスはもう一つの方法を対比させる。それは永遠の観想より先に時間とは何かを思い描いて、想起によってこの世界から知性界へ遡っていくという方法である。時間が永遠との類似性をもつとすれば、時間は永遠に似ているように作られているので、この方法によって

永遠を観想することができるだろうとプロティノスは言う（20-24）。しかし第2章以下では、まず永遠とは何か論及されていて、後者の方法是用いられない。その理由はおそらく、時間から出発して永遠と時間との類似性を理解することが難しいからであろう。しかしながら、後で言及するように、プロティノスは第7章でもふたたび、時間とは何か先に見出されてから、どのようにして永遠のうちにいることができるかが知られるであろうと言う（6-7）。いずれにしろ、永遠と時間についてどちらを先に理解すべきかという問いはプロティノスによって繰り返される。

時間は永遠の像であるという前提は、プラトンの『ティマイオス』の説明に拠る。『ティマイオス』のデーミウールゴス（制作者）はこの宇宙の魂と身体を作った後で、これらを生み出した父として、宇宙が生きて動いているのがわかったとき、歎んでさらにいっそう原型に似たものを作ろうと考えた。原型そのものがまさに永遠なる生きものであるように、そのようにこの万有をもできるだけ同じようなものに作ろうと試みた。しかし、かの生きものの本性である永遠という性質を生み出されたものに完全に属させることはできないので、制作者は永遠の何か動く像を作ろうと考えた。そして宇宙を秩序づけるとともに、一のうちにとどまっている永遠の像を作り、この像を数にしたがって永遠に続くものとした。そしてこの像こそ私たちが時間と名づけたものであった。<sup>(3)</sup>

以上が永遠と時間についてのプラトンの説明である。ここで注目しなければならない点は、永遠と時間の関係が原型と像という関係であること、そして制作者が永遠なる生きものを原型として、この宇宙と時間を作ったことである。前者についてすぐに思い浮かぶのは、アイデアとアイデアを分有するものとの関係であろう。しかし、この関係と永遠と時間との関係とのあいだには違いがある。というのは、ほかのアイデアのばあいとは違い、永遠と時間との類似性が明らかでないからである。たとえば、目に見える何

か美しいものを手がかりにして、私たちは美しさそのものを想像し考えることができる。しかし、私たちは時間と時間そのものを区別して、しかも時間そのものが永遠であるという言い方をすることはできない。プロティノスがすでに、「もし時間が永遠との類似性をもっているとすれば」(24)と言ったのは、この点に気づいていたからであろう。むしろ永遠は知性界の最高類に近いものと考えられる。このような意味でプロティノスは第2章、第3章で、永遠とは何かについて永遠と最高類の関係を明らかにしようとする。

それでは、プラトンは永遠と時間の関係についてどのように考えるのだろうか。もう一度繰り返せば、生まれてきた宇宙が生きていて動いているのを見て制作者は歎び、さらにいっそう原型に似たものを作ろうと考えたということである。この説明の少し後でプラトンは、「時間は宇宙とともに生じた」<sup>(4)</sup>とも言う。これら二つの説明をどのように考えるかということとは、ここでは残された問題としておく。しかし、宇宙の二つの状態、つまり原初の無時間的な状態と時間が作られて現在のように経過していく状態とを比較して、時間をもっている状態のほうが時間のない状態よりもいっそうよく原型に似ているというのがプラトンの考えであったと私たちは言うことができるだろう。動き生きていて、しかも時間をもっていないこの宇宙に、どうして時間が与えられなければならないのだろうか。プラトンの考えでは、すでに言ったように、この世界が永遠の世界にいっそうよく似たものとされるためであった。<sup>(5)</sup>このことの意味をさまざまに考えることができるかもしれない。一つの可能性として、無時間的なこの宇宙と永遠のうちにある知性界とを比較すると、前者の生や動きが不充分であるので、「一のうちにとどまっている永遠」<sup>(6)</sup>に対して、この宇宙は、多である時間あるいは無限な時間において、いっそう充実したものとなるということかもしれない。

『ティマイオス』では永遠と時間の関係についてさらに、「時間は…宇宙ができるだけ原型と似たものであるように、永久的な本性の原型にしたがって生じた。というのは、原型は永遠全体にわたって「ある」ものであるが、宇宙は時間全体にわたっていつも「あった」もの、「ある」もの、「あるだろう」ものであるからである<sup>(7)</sup>」とされている。この説明では、むしろ永遠と時間の関係が原型と宇宙との類似性を示すものである。そしてこの類似性は、永遠と過去、現在、未来の時間全体との対比のうちに求められている。しかしこの記述だけでは永遠と時間との類似はかならずしも明らかではないように思われる。後で言及するように、プロティノスは第11章で永遠と時間を対比させながら、両者の類似と相違を明らかにしようとする。

つぎに、制作者をどのように考えるべきであろうか。この問いは「エイコース・ログス（またはミュートス）」として知られている問題と関連がある。プラトンは時間の創造だけでなく『ティマイオス』の宇宙論の全体を「ありそうな物語」（エイコース・ミュートス）と言う<sup>(8)</sup>。プラトンはこの宇宙創造の物語を文字どおりに考えていたのだろうか。それとも制作者の存在もふくめて、真実ではない、ありそうな物語にすぎないのだろうか。このことについて数多くの議論がある<sup>(9)</sup>。しかしミュートスを文字どおりに受けとるのであろうと、あるいは比喩的なものと見なすのであろうと、制作者がミュートスのなかで語られたということは意味のあることではないだろうか。少なくとも時間の創造について制作者が言及されている個所では、時間は自然に誕生したのでもなければ、また存在つまりアイデアそのものが時間を作ったのでもない。永遠の原型の像を作ったのは制作者であって、制作者は時間の経過のうちにない。それでは、永遠の像としての時間という前提をプラトンから受け継いだプロティノスは時間の誕生をどのように考えるのだろうか。これについては第11章をとりあげるときに明

らかにしたいと思う。

それから、私たちは永遠と時間を理解する方法について第2章以下を見ていく。第2章で永遠と知性界との関係を一般的に検討した後で、プロティノスは第3章で、「(知性的な本性の) 多様な力を凝視した人は、この本性を基体のような主語として実体と呼び、それから彼がその点において生を見るそれを動きと呼び、(この本性が) あらゆる点で同じようにあることを静止と呼び、これら(違うもの)が一しょに一つであるかぎり、相違と同一と言う」(8-11)と述べる。ここで最高類を知性の多様な力として凝視したと言われる人についてさらに、「これらの最高類をふたたび一つのものへと構成して、ただ一つの生であるようにして、これらのものにおける違いを圧縮して、その活動がやむことのないこと、知性作用(ノエーシス)あるいは生が同一であってけっして別のものになることはなく、あるものからはかのものへと変わることもなく、いつも同じで延長をもたないものであること、これらすべてを見た人は永遠を見た」(11-16)と言われる。

以上のようにプロティノスにとって、永遠とは何かを知ることは永遠を見ることであり、永遠を観想することである。<sup>(10)</sup>ここで注目しなければならない点は、ノエーシス(14)と観想との関係である。永遠を観想する作用とは、繰り返せば、知性の多様な力を凝視し、最高類を一つのものへと構成し、最高類のあいだの違いを圧縮し、ノエーシスがいつも同じであることを見ることである。したがって、永遠の観想は知性の段階における観想であり、ノエーシスであると言うことができる。というのは、知性の多様な力を凝視した人と対象である知性的なものとをプロティノスは区別しているように思われるけれども、知性界で凝視する人とはその人のもっている知性的部分で凝視する人でなければならないからである。また対象については、それが知性的なものであることは明らかである。永遠を見た人に

ついでに記述はそのままノエーシスの具体的な内容の説明である。

永遠の観想については第5章でさらに説明される。第5章の初めで、「しかし私が何かに魂によって注意を向けて、それについて以上のことを言うことができるとすれば、むしろそれを、それについて何ものも生じなかったようなものとして——というのは、何かが生じたとすれば、それはつねに存在するものではないし、あるいはつねに全体である何かではないだろうから——見ることができるときに、そのものはすでに永久的であるだろうか」（1—4）と言われる。しかしこの段階は「魂によって注意を向ける」段階であって、ノエーシスではない。この段階と対比してプロティノスは言う、「それでは、もし誰かがそのものの観想から離れることなく、それとともにいてその本性に感嘆し、倦むことのない本性によってそれを行うことができるとすれば、どうであろうか。あるいは、彼は永遠と似たものとなり、永遠的なものとなるために、彼自身走って行って、永遠のうちに入りけっしてそこから逸れることはないだろう、自分自身のうちの永遠的なものによって永遠と永遠的なものを観想しながら」（7—12）。ここでは、私たちが永遠を観想するのは私たち自身のうちにある永遠的なものによってであると言われている。このことから考えると、「倦むことのない本性」というのは、私たち自身のうちにある永遠的なもの知性的なものである。すでに言ったように、自己自身のうちにある知性的なものによって知性的な対象を観想することはノエーシスであり、永遠の観想とはまさにノエーシスのことである。

第1章の「私たちはどのようにして永遠と時間を理解するか」という問いで、永遠について観想つまりノエーシスによって理解することができるのであれば、私たちは時間をどのようにして理解するのだろうか。第7章で、私たちは永遠について語るときに、どのようにして私たちとかかわりのないものに触れることができるだろうか（3—4）という問いが提出される。

「それゆえに私たちも永遠にあずかっていなければならない。しかし私たちは時間のうちにいるのに、どのようにして永遠にあずかるのだろうか。しかし、どのようにして時間のうちにあることができるか、どのようにして永遠のうちにあることができるかは、時間が先に見出されれば知られるだろう。それから私たちは時間の探究と時間へと降りて行かなければならない。というのは、かの世界では道は上方へ向かっていたからである。しかしいま私たちは完全に降りてしまうのではなくて、時間が降りて行った程度まで降りて行って語ることにしよう」(4-10)。この個所で奇妙に思われるのは、時間が先に見出されて初めてどのようにして永遠のうちにあることができるかが知られるだろうということである。現に時間のうちにいる私たちは、時間とは何かを見出して初めてどのようにして永遠のうちにいるかを知ることができるだろう。しかし、プロティノスは永遠の像としての時間という前提をとり、しかもプロティノスの哲学では知性界における永遠の観想が可能であるので、永遠の定義から時間とは何かを明らかにしようと試みたと考えられる。そして時間を見出すためには、永遠から時間へと降りて行かなければならないと言われる。しかしこのような方法で時間について語るよりも先に、プロティノスは古代の哲学者たちの時間についての見解をとりあげて第9章に至るまで批判していく。そして第10章で、「私たちは時間とは何でないかを求めるのではなくて、時間とは何であるかを求める」(9)とプロティノスは言って、第11章以下で自分自身の見解を明らかにする。

## 2

第11章の初めでプロティノスは言う、「永遠において存在すると私たちが言ったあの状態へ私たち自身をふたたび連れもどさなければならない、



つまりあの静かな、全体が一しょにある、すでに無限な生へ、絶対に傾くことのない、一のうちでそして一へ向かって静止している生へ連れもどさなければならない。時間はまだ存在しなかった。あるいは少なくともこの世界のものたちには存在しなかった。私たちは後のものの言葉と本性によって時間を生み出すことにしよう」(1-6)。「あの状態」と言われている状態は、第4章ですでに「存在のこの状態が永遠であるだろう」(42)と言われたように、永遠について用いられて知性界を意味する。あの状態は生ζωή(3)という語で言い換えられる。この語も第5章で、「永遠は無限な生である」(25-26)と言われたように、永遠の定義で用いられる。

第8章から第10章まで、私たちは時間のうちにあるものとして時間の定義についての哲学史的な検討を行ってきた。しかし、時間とは何でないかをではなくて何であるかを知るためには、私たちは永遠のうちにある知性界へ遡って行かなければならない。なぜなら、時間は永遠の像であるので、原型である永遠の本質を理解してから、時間の探究へと進むのがふさわしいからである。プロティノスは時間を永遠と切り離せないものとして考えている。一般に時間について語るのが難しいのは、私たちの思考だけでなく生の全体が時間のうちで経過して行って、私たちが時間の外へ出ることができないからである。しかし、プロティノスにとってこの困難は永遠の観想という時間を超越する視点によって解決されている。

このようにして知性界へ遡って行った私たちには、しかしながら、時間はまだ存在しなかった。永遠のうちに時間を直接見出すことができないのは当然である。したがって、私たちは永遠からの下降において時間とは何かを明らかにしなければならない。すでに、「私たちは後のものの言葉と本性によって時間を生み出すことにしよう」(5-6)と言われた。「後のもの」とは、知性の後に来るものつまり魂である。永遠の観想が知性界に属するノエーシスであるか、またはそれと類似のものであるとすれば、時

間の誕生は魂の段階に属する。しかし、これは時間的な意味で後のものではなくて、形而上学的な意味で後のものである。それから「言葉」と訳したギリシア語の「ロゴス」 *λόγος* は多くの意味をもっている。知性界ではなくこの世界に属する「言葉」であり、神話や叙事詩と対比して用いられる「説明」である。またこの章の後の部分で、いわゆる「種子的理性」という意味の「ロゴス」<sup>(11)</sup> (24) が使われている。いま問題にしている「ロゴス」もこの意味で理解することもできるかもしれない。この宇宙のロゴス（種子的理性）を展開させることによって時間を生み出すという意味である。つまり私たちが種子的理性を展開して時間を生み出すということは、私たちが時間の誕生を私たちの言葉によって説明するというのである。

それでは、時間の誕生はどのようにして説明されるのだろうか。「これら（知性界のもの）は自分自身のうちで静かにしていたのに、時間は「どのようにして初めて降りて来たのか」」（6-8）とプロティノスは言う。「どのようにして初めて降りて来たのか」という個所はホメロスの『イリアス』からの引用であり、<sup>(12)</sup> そこではホメロスはムーサたちに話を聞かせてくれるよう呼びかけている。これに対して、プロティノスは、時間がまだ存在しなかったときには、ムーサたちはまだ存在していなかったので、ムーサたちを呼ぶことはできないだろうと言う（8-9）。というのは、ギリシアの神々是不死であるとはいえ、時間のうちで誕生したものであるから、時間が存在しなかったときには、神々も存在しなかったからである。さらにムーサたちがそのときいたとしても、生まれてきた時間に自分の誕生を語らせることはできるだろうと言われる（9-11）。<sup>(13)</sup> 神々の誕生の物語と同じように、時間の誕生についての物語（ミュートス）はムーサにふさわしいかもしれない。しかし時間の誕生を形而上学的に明らかにするためには、おそらく叙事詩（エポス）よりも説明（ロゴス）のほうが適切である

とプロティノスは考えたのであろう。

時間が自分自身について語るところによると、「以前には、つまり時間がこの「以前」を生み出して「以後」を必要とするまえは、時間はそれ（永遠）とともに存在のうちで休息していた。まだ時間ではなくて、それ自身も存在のうちで静かにしていた」（12-14）。ここの「存在」とは、言うまでもなく、知性界の存在である。知性界では時間は時間として存在していないにもかかわらず、プロティノスは時間の起原を知性界に求めなければならないと考える。それでは、まだ時間ではなくてやがて時間となるだろうものとは何であろうか。「多くのことに手出しする本性があり、自分自身を支配して独立したいと思い、現にあるものよりも多くのものを求めることを望んで、それ自身も動き、時間自身も動いた。そして私たちはいつも「それから」と「後」へ、そして同じものではなくてつぎつぎと違うものへと動いていきながら、何らかの長さの歩みを進んで永遠の像である時間を作り上げた。というのは、魂には何か落ち着きのない能力があり、かの知性界で見られるものをいつもほかのものへと移そうとしているので、魂は全体が一しょのまま自分で自分に現存することを望まなかったからである」（15-23）とプロティノスは言う。「多くのことに手出しする本性」（15）とは魂の何か落ち着きのない能力（20-21）である。魂は知性界の存在よりも多くのものを求めて動いた。言い換えれば、知性界を離れることを望んで動いたのである。そしてこの動きが時間の誕生をひき起こした。あるいはこの動きがそのまま時間の動きであると言うことができるかもしれない。したがって、この動きは知性界の最高類の一つである動きではなくて、多なるものであり、延長をもつものである。これに対して、知性界における永遠や生は延長を欠いているものである。<sup>(14)</sup>この魂による時間の産出を私たちは『ティマイオス』の制作者による時間の創造と比較することができる。魂の動きがこの世界への下降であることは明らかである。制作者はこ

の宇宙ができるだけ原型と似たものであることを望むという意志をもって時間を作ったのに対して、魂は知性界から下降しようという意図によって動き、この動きが時間を生じさせた。しかし、プロティノスの説明においても永遠と時間の関係は原型と像の関係である。

つぎに注目しなければならない点は、「私たちは永遠の像である時間を作り上げた」(20)ということである。「私たち」という言い方はこの章の初めでも用いられ(1)、「私たちは時間を生み出すことにしよう」(5)という個所でも用いられた。アームストロングは20行めの「私たち」を5行めの「私たち」と関連させながら、「私たち」は魂であり、宇宙魂の部分であると言う<sup>(15)</sup>。時間とは何かを知るということは、プロティノスにとって、私たちつまり私たちの魂が知性界へと遡り、宇宙魂とともに知性界からこの世界へふたたび下降することによって、時間の産出を理解し記述することである。このような意味で私たちは時間の産出を経験すると言うことができるだろう。

それからプロティノスは、魂が時間を作り出す過程を、種子的理性(ロゴス)が自己を展開していく過程によって説明する。まず理性について、「静かな種子から理性が自己を展開し、自分の思うところでは多大なものへと進出して、その多大なものを分割によって消滅させ、自分自身のうちの一を維持するかわりに、自分自身の外でその一体性を費やして前進し、いっそう弱い長さとなるように」(23-27)と言われる。この個所ではロゴスが自己を展開することについて一般的な説明が与えられている。ここで理解しにくいのは多大なもの *πολύ* (24) の意味である。バイアーヴァルテスはこれを質的な意味に理解する<sup>(16)</sup>。理性は種子の状態から展開された状態を多大なものと思って、自己を展開する。しかし本当は、静かな種子の状態こそむしろ充実していて、理性は自己を展開させることによって、多大なものと思われたものを消滅させることになる。後半の部分で、理性

は自分自身の一体性を失って、つまり多なるものへと進んでいっそう弱い長さとなると言われる。「長さ」についてはすでに、「何らかの長さの歩みを進んで永遠の像である時間を作り上げた」と言われたように、魂が動いていく長さは時間であり、時間の誕生はロゴスの展開によって説明することができる。

上の引用文に続く文でプロティノスは、「ちょうどこのように魂自身もかの世界の模倣によって感覚される宇宙を作る」(27-28)と言う。ここでは宇宙と時間の誕生が、ロゴスの自己展開とともに、原型と像というプラトンの視点から説明される。この感覚される宇宙の動きは知性界の動きではなくて、知性界の動きに類似した動きであり、この宇宙は知性界の動きの像であろうとする動きをする。このような宇宙を作ろうとして、魂はまず自己を時間化し、つぎに魂は、生まれた宇宙全体が時間のうちにあるようにして、宇宙のすべての過程を時間のうちに包みこみ、宇宙を時間に隷属させた(28-33)。宇宙と時間の誕生についての以上の説明はだいたいプラトンの『ティマイオス』に依るものであると言うことができる。しかし『ティマイオス』と違う点を繰り返せば、宇宙と時間を作る者が制作者ではなくて魂であるということである。そして魂がこの宇宙を作ろうとして自己を時間化したというのは、魂が知性界にとどまらないで下降したということである。

つぎに、魂がこの宇宙を時間に隷属させたことの理由が述べられる。というのは、この宇宙が魂のうちにあり魂のうちに動いているので、魂の時間のうちでも動くということになるからである(33-35)。魂は自分の活動を一つ一つ継続して ἐπέεργεσάσθαι 出し出していくことによって、活動とともに「継続するもの」を生み出した。先の活動の後につぎつぎと生じる思考とともに以前存在しなかったものが現れた。というのは、思考は活動させられていなかったし、現在の生は以前の生に似ていないからである(36-

40)。ここで「継続するもの」や「以前存在しなかったもの」と言われているものは時間であり、また活動(35)とは思考(38)のことである。思考(ディアノイア)は魂の行う推理的思考であり、まさに時間のうちにおいて時間の経過を必要とするものである。知性界における永遠の観想がノエーシスであるとするれば、魂が時間のうちで行う活動はディアノイアである。時間の誕生以前には、ディアノイアは活動させられていなかった。言い換えれば、魂がディアノイアの活動をするということが時間を生み出すということである。このような魂の生が知性界における永遠の生と違うのは明らかである。

それからプロティノスは生という視点から時間について考えていく。魂の現在の生は、魂の活動がそうであるように、一つ一つ違う生として現れて、この違いが違う時間を所有することになり、生が一つ一つ違う生へと分離することが時間を所有することである(40-41)。そして時間を生によって定義しようとする試みにおいて、プロティノスはつぎの問いを提出する、「もし誰かが、時間とは、ある生活から別の生活へ移って行く動きにおける、魂の生であると言え、その人は何か意味のあることを言っていると思われるだろうか」(43-45)。

この問いを明らかにするために、この宇宙が知性界の像であるように、時間は永遠の像であるという前提が繰り返される。まず永遠とは、「静止と同一における生であり、不変ですでに無限な生」(45-46)である。それから永遠と時間を比較して、プロティノスは永遠のいくつかの性質を時間の性質へ言い換える。知性界の生のかわりに、同語異義的な用法で魂のこの能力の生が述べられる。この能力とはすでに、魂の「何か落ち着いた能力」(21)と言われたものである。知性界の生と魂の生は「同語異義的な」(49)ものと言われるように、その性質は違うものである。しかし時間が永遠の像であるとするれば、永遠と時間とのあいだには、違いと同時に共

通なものがなければならない。この共通なものを「生」という語が表現しているのではないだろうか。永遠と時間の対比についてはまず、知性的な動きのかわりに魂のある部分の動きがあり、同一性と「同じように」とどまるものかわりに、同じもののうちにとどまらないでつぎつぎと違う活動をするものがある。言い換えれば、知性とノエシスのかわりに、魂とディアノイアがある。さらに延長や分離のない一であるものかわりに、一の影像である連続した一つのものがある。すでに無限で全体であるものかわりに、無限へ向かっていつも「続いていくもの」がある。またすべてが一しよにある全体かわりに、部分部分が存在しようとする全体、そしていつも存在しようとする全体がある（45-56）。

以上のように、時間は永遠の像であるという前提から、時間の性質を永遠の性質と対比させて説明することができる理由について、プロティノスは言う、「というのは、もし時間が、存在することにおいていつも獲得しながら存在しようとするれば、このようにして時間は、すでに全体で一しよにあるもので、すでに無限なものを模倣するであろうから。というのも、このようにして時間の存在は知性的なものの存在を模倣するだろうから」（56-59）。時間は、存在という点でいつも存在を獲得しながら、存在しようとする。このことは、時間が永遠を模倣するということであり、時間の絶えることのない存在が知性的なものの存在を模倣するということである。最後に、時間と魂との関係が永遠と知性との関係に等しいことから、時間は魂の外部にあるものではないし、また魂に伴うものでもなく、魂の後から生じたものでもなくて、永遠が存在つまり知性に対してそうであるように、時間は魂のうちに見られるもの、うちにあるもの、ともにあるものであると言われている（59-62）。

時間の誕生についての第11章の説明は以上のとおりである。最後に、第1章で示された、永遠の像としての時間という前提と永遠と時間を理解する方法についても一度言及したいと思う。『ティマイオス』では、制作者はこの宇宙がいつそう原型と似たものであるように、永遠の像である時間を作った。これに対して、たしかにプロティノスの議論はこの前提のもとに進められているけれども、プロティノスは、この宇宙と時間を作ったのは魂であると考え。しかも制作者がアイデア界の外で時間を作るのに対して、プロティノスの宇宙魂は知性界から下降することによって時間を作る。そして宇宙魂による時間の制作がどのようにして行われるかを知るためには、私たちは知性界へ上昇し、宇宙魂の下降にしたがってふたたび下降しなければならない。

プロティノスのこういった考えについて、いくつかの点に注目しなければならない。まず時間は永遠の像であるという前提と永遠と時間を理解する方法とは、すでに言ったように、プロティノスによって切り離せないものとして考えられていることである。つまり永遠とは何かを知ることは、知性界へと上昇して永遠を観想することであり、時間とは何かを知ることは知性界へ上昇しふたたびこの世界へ下降することである。時間について上昇と下降が必要である理由は、まさに時間が永遠の像であるからである。知性界に時間そのものを見出すことはできないけれども、永遠の像としての時間を知るためには、知性界への上昇と知性界からの下降が必要である。すでに言ったように、私たちはある意味で時間を生み出して、時間の創造を経験することができる。言い換えれば、知性界への上昇と下降によって私たちは時間の創造を説明することができる。そして時間の誕生とは逆に、時間の消滅を私たちは知性界への上昇によって説明することがで



きる。第12章でプロティノスは言う、「もし私たちが言葉によってこの能力の向きを上方へと変えてこの生活を止めるとすれば——魂は現にこの止むことのない、終ることのない生活をもっている。なぜなら、この生活はつねに存在しているある魂の活動であり、その活動は魂に向けられているものでも魂のうちにあるものでもなくて、制作と産出のうちにあるものであるから——もし魂がもはや活動しないで、この活動を止めて、魂のこの部分もかの世界と永遠とへ向き直って静けさのうちにとどまると私たちが仮定すれば、永遠の後になお何が存在することができるだろうか」（4—12）。「この能力」や「この部分」と言われるものは、魂の何か落ち着かない能力である。ここでは、この宇宙の現在の生活が止むことも終ることもないことをプロティノスは認めているけれども、知性界への上昇によって時間の消滅の可能性が示唆されている。そして時間の消滅が現実でありえないのは、知性界へ上昇しなければならぬのが私たちの魂ではなくて宇宙魂であるからである。永遠についても一度繰り返せば、永遠とは何かを知ることができるのは、私たちが永遠を観想することができるからである。さらに、永遠の観想が可能であることの理由は、私たちが自己のうちに永遠的なものをもっているからである。<sup>(17)</sup>

つぎに『ティマイオス』の制作者による時間の創造との違いとして、プロティノスにおける時間の誕生ではロゴスの自己展開がある。ロゴスが自己を展開するのと同じようなしかたで、魂は永遠のかわりに時間を作り出したと言われた。このロゴスの自己展開は、制作者による時間の創造には見あたらない点である。この考えは、時間の誕生の原因を知性界の外部に求めないで、魂の知性界からの下降にあると考えるプロティノスの見解と関係がある。『ティマイオス』のように知性界とこの宇宙の外部から働きかけるのではなく、宇宙魂は自己を展開することによって時間を作り出す。時間の誕生も、一なるもの、知性、魂、宇宙という系列の内部で考え

なければならない。

最後に注意しておかなければならない点は、プロティノスが記述した時間の誕生を文字どおりの時間の起原と考えてはいけないということである。第6章で、「この宇宙も何らかの時間的な初めをもたなかった」(52f.)とされている。時間は未来の方向において無限であるだけでなく、過去の方向においても無限である。というのも、時間は永遠の像であるから、永遠の無限性をこのようなしかたで模倣するからである。それでは、時間が初まりをもたないで永続するものであるとすれば、なぜ時間の誕生が語られるのだろうか。なぜならば、時間を理解することはプロティノスの哲学において、時間を生み出すことであると言い換えることができるからである。しかし、時間を生み出すのは宇宙魂であって個人の魂ではないという反論があるかもしれない。プロティノスは「永遠と時間について」の最後の部分で言う、「それでは、私たちのうちにも時間があるだろうか。時間はこのようなすべての魂のうちにあり、すべての魂において同じ形で存在し、そしてすべての魂は一つである」(13, 66f.)。

(1993年10月3日)

## 注

- (1) *Vita Plotini*, 25, 7.
- (2) 『エネアデス』の原文は、*Plotini Opera*, ed. Paul Henry et Hans-Rudolf Schwyzer (Paris et Bruxells)を用いる。
- (3) 37 c 6-d 7.
- (4) 38 b 6.
- (5) 37 d 2.
- (6) 37 d 6.
- (7) 38 b 8-c 3.

- (8) 29 d 2.
- (9) たとえば、タラン L. Tarán は “The Creation Myth in Plato’s *Timaeus*” という論文で、『ティマイオス』の宇宙論はまったくの物語であって、真実には宇宙は永遠に存在していると主張する (*Essays in Ancient Greek Philosophy*, Edited by J. P. Anton with G. L. Kustas (New York) pp. 372-407)。
- (10) 1, 21.
- (11) アームストロングはこのロゴスを ‘formative principle’ と訳している (*Enneads* III, Translated by A. H. Armstrong (London and Cambridge, Mass.), p. 939)。
- (12) XVI, 112-113.
- (13) 「自然と観想と一なるものについて」(『エネアデス』III 8) の第4章の初めの部分(1-14)も、誰かが自然に何のために作るのかとたずねたとして、擬人化された自然がたずねた者に答えるという構成である。
- (14) 2, 31-32 : 3, 37.
- (15) *Ibid.*, p. 338 f.
- (16) *Plotin, Über Ewigkeit und Zeit*, Übersetzt, eingeleitet und kommentiert von W. Beierwaltes, p. 258.
- (17) 5, 11.